The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	後期近代における自己の多元化の傾向とアイデンティティ理論に関する動向と展望
Author(s)	藤野, 遼平
Citation	大阪大学教育学年報. 2021, 26, p. 51-62
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/79117
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

後期近代における自己の多元化の傾向と アイデンティティ理論に関する動向と展望

藤　野　遼　平[*1]

大阪大学[*1]

【要旨】

本研究では，後期近代における自己の多元化の傾向とアイデンティティ理論についてレビューを通じて検討した。後期近代では経済構造の変革，テクノロジーの発展，価値観の多様化といった背景から状況に応じて多様な自己を振る舞い分ける傾向が強まっている。その一方で，Eriksonのアイデンティティ理論をはじめとする過去の研究からは自己が多元化していることは精神的健康を阻害することが明らかになっている。しかしながら実証的研究によって，自己が多元化しつつもアイデンティティを形成し，精神的健康を保っている青年が報告されている。自己が多元化する傾向がある後期近代においてアイデンティティは，移り変わる状況の中で効果的に自己をマネジメントするためにより重要度を増している。近年では「居場所」の観点から青年のアイデンティティを支援する研究報告もなされている。しかしながら自己の多元化とアイデンティティに焦点を当てた研究はまだ数が少なく，さらなる研究が望まれている。

はじめに

近年，日本の青年期の若者において，異なる場面や状況に応じてその場にふさわしい「キャラ」を振る舞うといったように，状況に応じて多数の自己を切り替える傾向が報告されている（千島・村上，2016; 藤野, 2019）。また，労働形態の流動化やワークライフバランス，副業・兼業の促進など，経済活動を中心とした日々の生活においても自己の切り替えが注目を浴びている。さらに人種意識やジェンダー意識が変容してきたことにより，多様な人種や性の在り方を多様なまま認める風潮も強まってきている。例えば，テニスプレーヤーとしてグランドスラムでの優勝経験も多いの大坂なおみ選手は母が日本人であり日本国籍を取得しているが，幼いころからアメリカにおいてハイチ系の家庭環境で育ってきた。このような多種多様な文化と共に歩んできた彼女は，自身のアイデンティティを「日本人」としての自分，「ハイチ系」としての自分，「アメリカ育ち」としての自分のどれか１つに集約させるのではなく，その多様な在り方をそのまま受け止めている在り様が窺える。

Eriksonはアイデンティティの形成には，それまでにおいて形成してきた自己をその共同体で承認されるような単一の自己へと統合することが必要であり，特に青年期においてはそのようなアイデンティティの形成が発達課題として前面に現れてくると指摘している（Erikson, 1959）。しかし後期近代と呼ばれる現代においては多様な自己を取捨選択することなく包含している自己の在り方が青年を中心に認められる。

本論文では自己の多元的な在り方が心理学においてどのように論じられてきたかを整理し，そのうえで後期近代において自己の多元的な在り方が促進されてきた背景について論考し，従来と異なる多元的な自己のアイデンティティと後期近代におけるアイデンティティの有用性について検討することを目的とする。

自己の単一性と多元性

人の精神が単一のものか多元的なものかという議題は古くから論じられており（Lester, 2012），近代において心理学が学問分野として設けられてからも，自己を多元的なものと考える指摘は多く存在している。James（1890）は自己を主体としての自己である「主我（I）」と対象としての自己の「客我（me）」に分けてとらえ，「客我」をさらに物理的自己と社会的自己と精神的自己の３つに分けている。そのうえで関りを持つ人たちから受ける認識である社会的自己について「人は自分を認めてくれる人の数だけ社会的自己を持つ」としている。James以後もJudd（1907）やPillsbury（1914），Prince（1928）などの初期の心理学者によって多様な自己が存在していることが言及されている。このように，状況や時に応じて我々の感じ方や行動が多種多様に変化し，かつ様々に振る舞い分けられる自己を認識しているといった自己の多元性については，古くから指摘されてきた。臨床心理学の分野においても自己の多元性について言及されており，それをカウンセリングにおいて応用することも行われてきた。精神科医のBerne（1961）は，自我は「親・大人・子供」の３つの状態からなり，場合によってそれぞれ統制権が変化すると考え，その理論をもとに交流分析という心理療法理論を提唱した。またキャリア心理学においてもNevil & Super（1986）は，人生全体に占める「子ども」「学生」「余暇人（余暇を楽しむ人）」「市民」「労働者」「家庭人（家事，育児，介護）」などの多くの役割について整理し，生活段階や各々の場面によって複数の役割を同時に担ったり，それぞれの役割が互いに影響を及ぼしたり重なりあったりしながら蓄積されてキャリアが形成されていくと指摘した。さらに，Hermans & Kempen（1993）は「対話的自己（Dialogical Self）」という概念を提唱している。これは，自己の世界に存在する様々な自分や他者，ものをポジションとして扱い，状況に応じて語る主体（I）が，それぞれのポジションの立場に立って自己を振る舞うという理論であり，複数の自己が形成され存在している「自己の分権化」のパラダイムが提示されている。溝上（2013）は自己の分権化を実証的方法を用いて示し，ポジションによって自尊心や自己イメージが異なることを指摘している。

一方でMcReynolds, Altrocchi, and House（2000）によれば，1930年代から1970年代は自己は単一で一貫性を持つという見方が優位な時代であった。Leckey（1945）による“Self-Consistency: A Theory of Personality”を顕著な傾向として，パーソナリティ心理学や発達心理学の分野において自己の単一性が多く主張されるようになった（e.g., Allport, 1937; McClelland, 1951; and Murphy, 1947）。臨床心理学の分野においてもRogers（1959）はその治療モデルとして自己概念（理想的自己）と経験（現実的自己）を一致させることを治療モデルとして提唱し，またErikson（1950）もアイデンティティを確立するために自己が一貫していることの必要性について繰り返し言及している。Baumeister（1998）は自己が単一のものであると強く指摘している。

自己との多元性と精神的健康

前項では自己の単一性/多元性が心理学においてどのように扱われてきたかを整理した。そのうえで，自己の単一性/多元性と精神的健康はどのような関連を示しているのであろうか。

Linville（1985，1987）によれば，自己概念が多くの側面に分けられている自己複雑性（Self-complexity）が高い人は，ストレスフルな出来事による影響は直接関連する自己の側面に限られるため，ストレスフルな出来事に対する緩衝器として働くとし，複雑性が高い人はストレスフルな出来事の後でも鬱になりにくく，ストレスを感じることが少なく，病気にもかかりにくいという結果を示している。

一方で自己が多元化していることは精神的健康を阻害するという報告もなされている。Donahue, Robins, Roberts, & Johen（1993）は，自己が様々な役割ごとにどの程度分化しているかという観点から自己概念の分化度（SCD）を測定した。そのうえで自己概念の分化度が高いほど自尊感情が低く，抑うつ傾向が高いことが明らかになっている。またCampbell, Trapnell, Heine, Katz, Lavallee, & Lehman（1996）は，自己概念の内容および自己信念が明確かつ確実に定義され，さらに内的に一貫し通時的に安定している程度を示す自己の明確性という観点から尺度を作成し，自己の明確性が低い人は自尊感情が低く，神経症傾向が高いことを明らかにしている。加えてAltrocchiとMcReynolds（Altrocchi, 1999; Altrocchi & McReynolds, 1997; McReynolds, Altrocchi, & House, 2000）は自己複数性という概念を提示している。自己複数性とは，自身が多様であり，時と場合によって反応が異なると感じる程度，あるいは自分自身は統一されていて，状況によらず反応が一貫していると感じる程度と定義される。自己複数性においては，不適応や現実生活における長期間の行動変化との間に正の相関，年齢との間に負の相関が確認されている。またLenox（1984）では，状況に応じて自己の振る舞いを変化させる傾向は社交不安と正の相関を持つことが示されている。加えて，自己複雑性について調査したWoolfork, Novalany, Gara, Alklen, & Polino（1995）では，自己複雑性はストレス耐性と関係なく，むしろ否定的側面における自己複雑性は自尊感情の低下や抑うつと関連することが報告されている。

青年期におけるアイデンティティの持つ役割

前項にて自己の多元化と精神的健康との関連について整理した。その結果，自己の多元化はおおよそ精神的健康を損なう傾向が高いことが示された。上述したように，自己を健康に保つためには自己が単一のものへと統合されていることを前提とする理論は多く存在する。本章ではその中でもEriksonによって提唱されたアイデンティティに焦点を当てる。

発達段階として，上述したような自己の統合や複数性，拡散などが立ち現れてくるのが青年期であり，特にアイデンティティの問題として現れてくる。青年期は自分とは何者かといったアイデンティティを模索する時期であり，子供のころからの発達過程において持った様々な自己を，本当に自分にふさわしいものなのか検討し，それらをまとめようと試みる（Erikson，1959）。

青年期のアイデンティティの探索においては自分の中で自分が連続しているという内的な同一性と共に，変化する社会的役割や人間関係といった外的現実にも適する自分というものをまとめ上げる必要がある。Eriksonによれば，そのようなアイデンティティの探索は役割実験を通じて行われてゆくとされている（Erikson，1959）。役割実験は社会における自らの適所を見つけるために行われる活動であるとされており，現代においてはアルバイトやインターンシップ，サークル，学業，ボランティアといった様々な社会的活動を通じて行われる（堀合，2011; 小沢，2004; 水間，2006）。役割実験を通じて，青年は社会の中での適所を見つけ，内的な同一性を確立するとともに社会集団や人間関係において自己が承認されることによって外的な同一性も確立してゆく（Erikson，1959）。役割実験を行う過程において，青年は一時的に多様な役割やそれに伴なう多面的な自己を持つとされており，青年期中期以降になると関係に応じて自己が分化する傾向も高くなる（Harter，1999）。日本においても，中学生よりも高校生と大学生の方が自己の分化度が高いことが示されている（佐久間，2006）。多面的な自己を有することは役割葛藤に伴うアイデンティティの拡散を生じさせ，抑うつや不安，神経症傾向など精神的健康の低さと関連する（Block，1961; Donahue，Robins，Roberts，& John，1993）。しかしErikosn（1959）は，葛藤を引き起こす多面的自己は，役割実験を通じて適所を見つけることによって一貫した自己へと統合されることによって，精神的に安定してゆくとした。

後期近代における自己の多元化と社会構造の変化によるアイデンティティ理論への批判

前項でEriksonによるアイデンティティ理論について概観した。しかし近年では社会構造の変化などを要因として，従来のアイデンティティ理論に対する批判が多く論じられている。本章ではその中でも，アイデンティティ理論が前提としている自己の単一性と相反する自己の多元化の傾向およびその要因とされている社会構造の変化に注目し，従来のアイデンティティ理論には当てはまらない点について検討する。

まずErikson（1959/2011）以後において，自己を統合せず，変幻自在で姿を状況に応じて変えるアイデンティティを持つ「プロテウス人間／自己」の存在がLifton（1967/1971）によって既に指摘されており，日本でも1970年代に小此木（1978）がそのような若者の存在を指摘している。またアイデンティティステイタスを提唱したMercia（1989）も「文化的に適応した拡散型アイデンティティ」という類型が急速に増えていることを指摘している。特に「後期近代」や「ポストモダン」と称される現代社会の状況がアイデンティティに影響を与えているという指摘は多くなされており（Schacter, 2004; 2005; 2014; Rattansi & Phoenix, 2005; 浅野, 1999; 2015; 岩田, 2006, 溝上, 2016），現代の西洋社会における前例のないほどの急速な社会的・経済的・文化的変化がアイデンティティに影響を与えていると示唆されている。特にGergen（1991）は後期近代における社会状況の変容とテクノロジーの発展によって，異なる状況において異なった自己を振る舞う傾向が促されていると指摘し，このような自己を「飽和した自己（Saturated Self）」と呼び，個人内で首尾一貫して矛盾のない『ほんとうの自己』，『基本的な自己』という概念に疑問を抱くようになると指摘している。

自己の多元化が社会状況の変化によって生じているという指摘は日本でも社会学をはじめ多くなされている。浅野（2015）は若者を中心とした現代の友人関係は「状況志向」であるとし，現代においては付き合う友人に応じて異なる自分を振る舞うことが自然となっていると指摘している。また辻（2004）も，現代においては状況依存的な若者がそれぞれの状況における自分に対して自分らしさを抱いている傾向を指摘し，一貫した自我構造を持つ「一元的自我」に対し，複数の「本当の自分」を持ち状況に応じて使い分ける「多元的自我」を新たなアイデンティティの在り方として示している。岩田（2006）は，社会調査で使用した自己意識に関する尺度を因子分析し，「意識して自分を使い分けている」といった「自己複数性」の因子は，「自分がどんな人間かわからなくなる」といった「自己拡散志向」の因子と異なるとしており，様々な自分を使い分けていることは自己拡散とは異なる因子であることが示された。溝上（2008，2016）も，自己定義が首尾一貫したまとまりのある自己体系の中に回収されず状況に応じて流動的に変化するように複数化・断片化しつつも社会にうまく適応している自己が生まれているとしている。

では後期近代のどのような特徴が自己の多元化というアイデンティティの変容に影響を与えているのだろうか。Rattansi & Phoenix（2005）は後期近代における以下の３つの特徴が青年のアイデンティティに影響を及ぼしていると指摘している。

まず１つ目に，経済が重工業を中心とした経済からサービス業や金融業を中心とした経済へと変化し，これに伴って単純労働の現象や女性労働者の増加，契約やパートタイムをはじめとする不安定もしくは一時的な雇用を含む雇用形態の多様化などが生じてきた（Schoon & Silbereisen, 2009; 溝上, 2014）。日本でも状況は同じで，日本経営者団体連盟（1995）は労働者を（a）「長期蓄積能力活用型グループ」（b）「高度専門能力活用型グループ」（c）「雇用柔軟型グループ」に分類し，終身雇用・年功序列を特徴としてきた「日本的経営」を転換し，有期雇用で昇給の無い（b）や（c）のグループを増やすことで，労働力の流動化･弾力化･低コスト化を提案している（松下, 2014）。流動的な有期雇用が増加することによって，若者は企業の環境に

自身を適応するような単一の自己へと統合させてゆくのではなく，移り変わる状況に適した自己に切り替えてマネジメントしてゆかざるを得なくなる。加えてワークライフバランス（厚生労働省，2010）や副業・兼業の促進（厚生労働省，2018）なども近年では注目を集めており，家庭や多様な職場に適した自己の形成が促されていると言えよう。

後期近代の２つ目の特徴として，この時代が前期近代に比べてより複雑で流動的であるということが指摘される。膨大なまでの技術革新が生じ，加えて階級間の流動も増加したことによりライフスタイルが多様化した。Gergen（1991）は，高度資本主義社会というグローバル化した現代においては，テクノロジーの発展と共に世界の至る所で他者と知り合いになり，何かしらの役割をとることが可能となっていると同時に自己が断片化してゆくと指摘している。このような中では，人は他者や他の集団から一貫した全体像を把握されることがなくなり，首尾一貫して矛盾のない自己ではなく，様々な状況においてその都度，異なった断片的な自己を経験するとしている（Gergen, 1991; McLeod, 1997）。またCoté（1996）も，状況の有利・不利に応じて流れるような自己を持つことが現代社会により適応した形態であると見なしている。

後期近代の３つ目の特徴として，フェミニズムやLGBTQ運動の台頭により新たな社会的ムーブメントが生み出されている。また，新しい世代の民族的マイノリティによって生み出された音楽や映画，ファッションなどによっても，若い世代を中心に，今まで先進資本主義の工業社会において特徴的であった古い階級意識やジェンダー意識，国家への忠誠心やアイデンティティの変容などが生じてきているとされる。近年ではジェンダー意識や国家意識，または人種などに端を発した単一の自己をアイデンティティ理論に対する批判的な論考が多く発表されている（e.g., 上野, 2005; Maalouf, 1998）。例えば「白人の日本人」や「フランス人と日本人のハーフ」,「アフリカ系アメリカ人の同性愛者」などが，それぞれ「アフリカ系アメリカ人」「日本人」「フランス人」「異性愛者」「同性愛者」という単一の自己の構成要素に還元されなければならず，他の自己を抑圧しなければならない理由はない。特にマイノリティはそのマイノリティによってその要素によってのみ自己が語られがちではあるが，その人の持つ多元性を単一の要素に還元しなければならないことに対しては異論がある（上野, 2005）。

Rattansi & Phoenix（2005）は上記の３点を中心とする社会構造の変化が若者のアイデンティティの多元化に影響を与えていると指摘しており，複数のアイデンティティに関する研究も近年において多数報告されるようになってきている（e.g., Parmaenter, Galliher, Yaugher & Maughan, 2020 ; Syed & Juang, 2014）。

木谷･岡本（2015）は, Eriksonが示すアイデンティティと近年において見られる多元的なアイデンティティの在り方の違いを以下の２点に示している。まず１点目として，Erikson（1959）のアイデンティティには，自我の働きとして複数の自己を統合する機能があるとして，多面的な自己が自我の力によって一貫した自己に統合され，一貫したアイデンティティが形成されるとしていた。それに対して近年における多面的なアイデンティティにおいては辻（2004）が述べたように，自己を一貫したものに統合しないという特徴があげられる。２点目として木谷･岡本（2015）は社会的同一性を形成する上での他者関係を挙げている。Erikson（1959）においては，アイデンティティ形成は役割実験において適所を見つけ，特定の社会場面や自分にとって重要な他者を選択することで心理社会的同一性を形成してゆくとし，自分にとって重要な他者や集団からの承認によってアイデンティティが形成されるとしている。しかしながら浅野（1999;2015）や辻（2004）においては，それぞれの他者や集団に合わせる形でそれぞれにアイデンティティを形成していることが特徴であるとしている。つまり，Erikison（1959）において社会的な同一性を確立するためには「適所を見つける」という場の選択に重きが置かれていたのに対し，現代においては役割や価値観の異なる集団や他者関係において，それぞれに合わせて自己を変化させることにより社会的な同一性を確立している。

後期近代における多元的な自己とアイデンティティの実証的研究

前項では，後期近代における自己の多元化の立場から論じられてきた，従来のアイデンティティ理論が前提としていた自己の単一性に対する批判について概観した。しかし，実際に多元的な自己の在り方とアイデンティティがどのように関連しているのかを実証的に示した研究は少ない。本章はそのような中において行われてきた３つの実証的研究について紹介する。

岩田（2006）は若者の自己の在り方を「場面によってでてくる自分というものは違う」という「状況性」によって自己を「多元的自己」と「自己一元型」に分けている。そのうえで多元的自己を「意識して自分を使い分けている」という「戦略性」によって「戦略的自己」と「非戦略的自己」に分類している。さらに戦略的自己と非戦略的自己のそれぞれを「自分の中には，うわべだけの演技をしているような部分がある」という「仮面性」によって「素顔複数型」「素顔使い分け型」「仮面複数型」「仮面使い分け型」に分類している。そのうえで上記の５分類をもとに「自己拡散因子」との関連を調査している。その結果，多元的自己でも「仮面性」の有無によって，自己拡散と関わる項目の肯定率にはかなりの違いが見られるとしており，「仮面性」を認めないタイプでは自己拡散の感覚が低く，また「素顔複数型」は一元的な自己にかなり近い傾向をもつとしている。

また木谷・岡本（2018）も質問紙調査によって青年期の若者を類型化し，自己拡散型と多元的自己群と一元的自己群の３つの類型を見出した。またそのうえでそれぞれの類型においてアイデンティティ感覚の程度に差があるのかを調査したところ，「現実の社会の中で自分自身を意味づけられるという，自分と社会との適応的な結びつきの感覚（谷，2001）」である「心理社会的同一性」においては多元的自己群は一元的自己群と有意な差はないことが示された。

海外でも自己が多元化しつつも健康的なアイデンティティの姿が報告されている。Schacter（2004）はインタビュー調査を行うことによって「選択と抑圧を基本としたアイデンティティ構造」「吸収・合成されたアイデンティティ構造」「“同一化連合”によるアイデンティティ構造」「“不協和のスリル”によるアイデンティティ構造」の４つのアイデンティティ構造を報告している。「選択と抑圧を基本としたアイデンティティ構造」は，同一化によって形成された自己の一つを選択し，この自己に対して自らの思考や行動がフィットするように自身の人生をもう一度形作ろうと試みようとするアイデンティティの構造である。その際，選択されなかった自己は拒絶され抑圧される。「吸収・合成されたアイデンティティ構造」は葛藤を生じさせるようなアイデンティティに対して，葛藤を生じさせていないかのように思えるような枠組みを創り上げたり見つけ出そうと奮闘するようなアイデンティティ構造である。「“同一化連合”によるアイデンティティ構造」では，対立する自己のどちらかを打ち捨てることを拒んでいる。なぜなら一部と言えど自己を拒絶することは自己の全体性を妨げるように思えるからである。もちろん，複数の自己は葛藤を生じさせるためその状態を不完全であるように思わせる。しかし，彼らにとっては，たとえ葛藤を生じさせても，すべての自己を保持し続けることが，彼らが自身に対して感じているその苦境を解決させる最善策となる。「“不協和のスリル”によるアイデンティティ構造」では，異なる自己間の衝突が刺激ややりがい，独自性の感覚を生じさせている。Schacter（2004）は，この「“不協和のスリル”によるアイデンティティ構造」では，複数の自己を持つことに喜びを感じているとし，現実の異なる側面，異なる時間を同一の人間でありながら経験することを可能にしていると指摘している。

アイデンティティ理論の後期近代における意義

前項では従来のアイデンティティ理論と矛盾する，多元的な自己によるアイデンティティの存在を示す実証的研究を紹介した。しかしながら，これはアイデンティティ理論の改訂が求められているということではなく，むしろ現代において有用性を失ってきているということを示しているのではないであろうか。本章では，アイデンティティの後期近代における有用性について検討する。

臨床心理学・精神医学的領域からもアイデンティティが診断における重要な観点ではなくなってきていることは，アメリカ精神医学会による精神障害の診断と統計マニュアル（DSM）においても見て取れる。第３版であるDSM-Ⅲ（American Psychiatric Association, 1980）において“Identity disorder”が診断分類として導入されたが，最新版のDSM-５（American Psychiatric Association, 2013）ではアイデンティティを診断分類の対象とする項目は削除され，アイデンティティの拡散において生じる不適応は不安症やうつ病に関連するものとして分類され，もしアイデンティティの拡散をその根幹とする症状が長年にわたり続いているようであればパーソナリティ障害の構成要素であると考えられるようになっている（Coté, 2018）。

このように，アイデンティティは近年の心理学において重要視されることが少なくなりつつあることは見て取れる。しかしながらCotéはアイデンティティの観点が現代においてより重要度を増していると指摘している（Coté & Levine, 2016;Cote, 2014; 2018）。

まずCoté & Levine (2016) は, 後期近代社会においては伝統的な規範やコミュニティの構造を破壊する（新自由主義的な変化とも見なされうる）グローバルな経済的・政治的変化が生じており，その結果，後期近代社会におけるライフコースはより「個人化」されてきていると指摘する。つまり社会の再編成が進むにつれて，次第に古い規範は廃れ，人は重要な人生上の決定をする際に，自身を頼りにするしかなくなる。そのような個人化されたライフコースにおいては，自分流のライフスタイルや，自分の好みや選択に基づく価値志向的戦略が重要となる。つまり後期近代においては, 人は自身で目標を設定し達成しながら自身のライフコースをうまく切り抜けて行けるような，自己決定的で自立した「個人」としての自分を発達することが求められている。すなわち，個人が社会に対して準拠点を置き，それに自身を適合させていくような，個人のライフコースへの社会の構造化の力が強かった前期近代社会に対して，個人のライフコースに対して社会構造の求心性が弱まった後期近代では，自らの価値や信念をより積極的に構築し，その価値や信念に基づいて職業選択や人生形成を行っていかなければならない（溝上, 2014）。このような社会状況においては，人は人生で出会う葛藤を自分にとって意味があり成長をもたらすようなやり方で解決しようとしつつ，職業を通じて生産的な日々を送ったり，親密な関係性を築いたり，共同体や社会に対して貢献し責任ある役割を果たしたりすることを通じてライフステージを歩み進めてゆこうとするアイデンティティ形成やその維持活動がより重要になってくる。

次に臨床心理学・精神医学的観点からもアイデンティティの観点は依然重要であるとCoté（2018）は指摘する。Erikson（1959）は，成人期へと至る際に生じるアイデンティティの混乱は人との関係における問題を生じさせ，時間的展望を歪ませて，必要な作業への集中を困難にし，ひとつの活動に対して過度なまでに没頭してしまうと述べている。これらの状態は，確かに，学業成績を下げ，ストレスに圧倒される感覚を若者に抱かせる。しかしこれらをうまく乗り越えてゆくことができるのなら，そのような状態は一時的なものであることも確かである。

Eriksonはアイデンティティの混乱は発達過程における潜在的な成長経験でもあるとして，医学的モデルで定義されるような障害とは区別すべきであると指摘している。カウンセラーはもちろん若者の症状に対し

て多様なアプローチで対応することができる。しかし，カウンセラーが若者のアイデンティティの混乱を精神医学的な障害であるとして患者としてラベリングしたのなら，若者はそのようなレッテルを内面化し，自らそのようなレッテルを成就するような予言を打ち立ててしまう（Klimstra & Denisen, 2016）。つまりアイデンティティの混乱を解決することによって得られる自己の成長というポジティヴな側面から外れ，精神障害のスティグマを受けると同時に成人期への移行が立ち遅れてしまう。

しかし現代においてもアイデンティティ理論が有効であり，むしろ増々その重要性を増しているとして，青年に対する対人支援の場ではそのようなアイデンティティに対してどのようなサポートを講ずればよいのであろうか。溝上（2007）は，後期近代におけるアイデンティティ形成は，特定領域における自己定義の形成という第一のプロセスと，特定の自己定義間の葛藤・調節という意味での統合形成という第二のプロセスの二段階で成り立っていると指摘し，特に第二のプロセスである矛盾した自己定義間の解消こそが後期近代のアイデンティティ形成プロセスの顕著な特徴であると指摘している。後期近代では前述したようなテクノロジーの発展と社会状況の変化から自己の多元化が促進されている。であるならば，青年における自己の多元化に伴って生じる自己間の葛藤に対する支援が喫緊の課題として求められていると言えよう。

しかし，アイデンティティ問題を生じさせている青年への効果的な介入方法に関する知識は依然手薄であり（Cote & Levine, 2016），モデル化された介入方法はいまだ開発されていない。しかしながら近年ではアイデンティティ問題に対して「居場所」という観点からの支援が注目を集めている（e.g. 乾･児島, 2014; 村澤・山尾・村澤, 2012）。「居場所」の定義については，「安心できるところ」「自分らしくいられるところ」「ありのままでいられるところ」などの要素を含んだ定義が複数の研究でなされているが，その定義が統一はされていない（中藤, 2017）。しかしながらアイデンティティと居場所感との間には有意な相関があることが報告されており（堤, 2002; 杉本・庄司, 2006），居場所があることによってアイデンティティが支えられている側面があることが指摘されている。特に乾・児島（2014）は，後期近代においては社会的制約が小さくなり既存のコミュニティが揺らぎ，若者のアイデンティティ形成・維持がもっぱら個人の主体的な能力に求められている現代においては，学校から就職へのトランジションのサポートやひきこもりなどの状態に陥る予防策や支援策が乏しいと指摘し，そのような若者がアイデンティティを形成・維持・回復でき，現状から次のステップへ移行することを支える「居場所」という「媒介的コミュニティ」が必要であると指摘している。居場所づくりをもとにした支援の事例研究なども多数報告されており（e.g. 川俣・河村, 2007），居場所をもとにしたアイデンティティ支援は注目を集めている。

結論

本論文では後期近代における自己の多元化とアイデンティティとの関連を検討した。自己の多元化は一般的に精神的健康を阻害する傾向がありアイデンティティ理論も単一の自己を前提として提唱されてきた。しかし価値観の多様化や労働市場の流動化などによってライフコースが多様化した後期近代では自己の多元化が促進されている。そのような中で，自己の多元化をきたしながらアイデンティティを形成している青年がいることが報告されている。

後期近代においては，移り変わる状況の中でも自らの目標を具体的に見定め，その目標のために自身を効果的にマネジメントする能力がより一層求められており，そのような操作を可能にするためのアイデンティティ形成は青年期の若者にとってより重要度を増している。しかしながら，ひとつの適所に適応するよう自我を単一へと統合してゆくアイデンティティの理論と，状況が常に多様に変化する後期近代との間には齟齬

が生じている。多様に変化し続ける社会の中で，様々な状況に対して柔軟に複数の自己を振る舞い分けつつも，アイデンティティを失わずにいるためにはどのような能力が求められるのか，またそのためにはどのようなサポートが青年に対して必要なのか。後期近代において求められているアイデンティティについて検討を重ねるためにも，この点に焦点を当てた更なるアイデンティティ研究が求められている。

引用文献

Allport, G. W. 1937 A psychological interpretation. Henry Holt.

Altrocchi, J. 1999 “Individual differences in pluralism in self-structure”, in The plural self: Multiplicity in everyday life, ed. by J. Rowan & M. Cooper, Sage, pp.168-182.

Altrocchi, J., & McReynolds, P. 1997 “The self-pluralism scale: A measure of psychologic variability”, in Obesity Assessment: Tools, Methods, Interpretations, ed. by S. T. Jeor, Chapman & Hall, pp.168-182.

American Psychiatric Association. 1980 Diagnostic and statistical manual of mental disorders (3rd ed.). Author.

American Psychiatric Association. 2013 Diagnostic and statistical manual of mental disorders (5th ed.). Author.

浅野智彦　1999 「親密性の新しい形へ」富田英典・藤田正之編『みんなぼっちの世界――若者たちの東京・神戸90’s展開編』恒星社厚生閣，41-57頁.

浅野智彦　2015 『若者とは誰か【増補新版】――アイデンティティの30年』河出書房新社.

Baumeister, R. F. 1998 “The self” in The handbook of social psychology Vol.1., ed. by D.T. Gilbert, S. T. Fiske, & G. Lindzey, McGraw-Hill, pp.680-740.

Berne, E. 1961 Transactional analysis in psychotherapy. Grove Press.

Block, J. 1961 “Ego identity, role variability and adjustment”, Journal of Counselling Psychology,Vol.25, pp.392-397.

Campbell, J. D., Trapnell, P. D., Heine, S. J., Katz, I. M., Lavallee, L. F., & Lehman, D. R. 1996 “Self-concept clarity: Measurement, personality correlates, and cultural boundaries”, Journal of Personality and Social Psychology, Vol.70, pp.141-156.

Coté, J. E. 1996 “Sociological perspectives on identity formation: The culture-identity link and identity capital”, Journal of Adolescence, Vol.19, pp.417-428.

Coté, J. E.　1996 「アイデンティティ資本モデル――後期近代への機能的適応」松下佳代・溝上慎一訳　溝上慎一・松下佳代編『高校・大学から仕事へのトランジション』ナカニシヤ出版.

Coté, J. E. 2018 “The Enduring Usefulness of Erikson’s Concept of the Identity Crisis in the 21st Century: An Analysis of Student Mental Health Concerns”, Identity, 18(4), pp.1-13.

Coté, J. E., & Levine, C. G. 2016，河合　亨・溝上慎一訳『若者のアイデンティティ形成　　学校から仕事へのトランジションを切り抜ける』東信堂　2020.

千島雄太・村上達也　2016 「友人関係における“キャラ”の受け止め方と心理的適応――中学生と大学生の比較」『教育学心理学研究』64，1-12頁.

Donahue, E. M., Robins, R. W., Roberts, B. W., & Johen, O. P. 1993 “The divided self: Concurrent and longitudinal effects of psychological adjustment and social roles on self-concept differentiation”, Journal of Personality and Social Psychology, 64, pp.834-846.

Erikson, E. H. 1950，仁科弥生訳『幼児期と社会』みすず書房　1977.

Erikson, E. H. 1959，西平　直・中島由恵訳『アイデンティティとライフサイクル』誠信書房　2011.

Gergen, K. J. 1991 The saturated self: Dilemmas of identity in contemporary life, Basic Books.

藤野遼平　2019 「青年期における『キャラ化』に対してパーソナリティが与える影響について」『大阪大学教育学年報』24，83-95頁.

Harter, S. 1999 The construction of the self: A developmental perspective. Guilford Press.

Hermans, H. J. M., & Kempen, H. J. G. 1993 The dialogical self: Meaning as movement. Academic Press.

堀合俊博　2011 「青年期の選択場面における勇気尺度作成の試み――漸成発達理論の枠組みから」『立教大学心理学研究』53，1-15頁.

乾　彰夫・児島功和　2014 「後期近代における〈学校からの仕事への移行〉とアイデンティティ――『媒介的コミュニティ』の課題」溝上慎一・松下佳代編『高校・大学から仕事へのトランジション――変容する能力・アイデンティティと教育』ナカニシヤ出版，215-236頁.

岩田　考　2006 「若者のアイデンティティはどう変わったか」浅野智彦編『検証・若者の変貌――失われた10年の後に』勁草書房，151-190頁.
James, W. 1890 Principles of psychology. Holt.
Judd, C. H. 1907 Psychology: General introducition. W. H. Freeman.
川俣理恵・河村茂雄　2007「中学で長期不登校を経験した女子生徒への高校相談室での居場所づくりを基盤とした援助」『カウンセリング研究』40(4)，287-294頁.
木谷智子・岡本祐子　2015 「青年期における多元的な自己とアイデンティティ形成に関する研究の動向と展望」『広島大学大学院教育学研究科紀要』64，113-119頁.
木谷智子・岡本祐子　2018 「自己の多面性とアイデンティティの関連――多元的アイデンティティに注目して」『青年心理学研究』29，91-105頁.
Klimstra, T. A., & Denissen, J. J. A. 2016 “A theoretical framework for the associations between identity and psychopathology”, Developmental Psychology, 53, pp.2052-2065.
厚生労働省　2010 「仕事と生活の調和（ワーク・ライフ・バランス）憲章」Retrieved from https://www.mhlw.go.jp/bunya/roudoukijun/sigoto-seikatu/pdf/charter.pdf（2020年11月1日）
厚生労働省　2018 「副業・兼業の促進に関するガイドライン」Retrieved from https://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-11200000-Roudoukijunkyoku/0000192845.pdf（2020年11月1日）
Lester, D 2012 “A multiple self theory of the mind”, Comprehensive Psychology, 1(5), pp1-11.
Lecky, P. 1945 Self-consistency: A theory of personality. Island Press.
Lenox, R. D. 1984 “Public self-consciousness, social anxiety,and variability of social behavior”, Psychological Reports, 54, pp.911-914.
Lifton, R. J. 1967，外林大作訳『誰が生き残るか；プロテウス的人間』誠信書房　1971.
Linville, P. W. 1985 “Self-complexity and affective extremity: Don’t put all your eggs in one cognitive basket”, Social Cognition, 3, pp.94-120.
Linville, P. W. 1987 “Self-complexity as a cognitive buffer against stress-related illness and depression”, Journal of Personality and Social psychology, 52, pp.663-676.
Maalouf A. 1998，小野正嗣訳『アイデンティティが人を殺す』ちくま学芸文庫　2019.
Marcia, J. E. 1989 “Identity diffusion differentiated”, in Psychological development: Perspectives across the life-span, ed. by M. A.Nettelbeck, Elseviser Science, pp.289-294.
松下佳代　2014 「大学から仕事へのトランジションにおける〈新しい能力〉――その意味の相対化」溝上慎一・松下佳代編『高校・大学から仕事へのトランジション』ナカニシヤ出版，91-117頁.
McClelland, D. C. 1951 Personality. Dryden.
McLeod, J.1997 下山晴彦監訳・野村晴夫訳『物語りとしての心理療法――ナラティヴ・セラピィの魅力』誠信書房　2007.
McReynolds, P., Altrocchi, J., & House, C. 2000 “Self-Pluralism: Assessment and Relation to Adjustment, Life Changes, and Age”, Journal of Personality, 68, pp.347-381.
溝上慎一　2007 「ポストモダン社会におけるアイデンティティの二重形成プロセスと心理学者の仕事」『心理科学』28(1)，54-71頁.
溝上慎一　2008 『自己形成の心理学――他者の森をかけ抜けて自己になる』世界思想社.
溝上慎一　2013 「ポジショニングによって異なる私――自己の分権的力学の実証的検証」『心理学研究』84，343-353頁.
溝上慎一　2014 「学校から仕事へのトランジションとは」溝上慎一・松下佳代編『高校・大学から仕事へのトランジション』ナカニシヤ出版.
溝上慎一　2016 「青年期はアイデンティティ形成の時期である」梶田叡一・中間玲子・佐藤　徳編『現代社会の中の自己・アイデンティティ』金子書房，21-41頁.
水間玲子　2006 「大学生のアイデンティティ発達における専門教育の意義について――心理学専攻の学生を対象に」『京都大学高等教育研究』12，1-14頁.
村澤和多里・山尾貴則・村澤真保呂　2012 『ポストモラトリアム時代の若者たち――社会的排除を超えて』世界思想社.
Murphy, G. 1947 Personality: A biosocial approach to origins and structure. Harper & Brothers.
中藤信哉　2017 『心理臨床と「居場所」』創元社.

Nevil, D. E., & Super, D. E. 1986 The values scale manual: Theory application and reseach. Consulting Psychologist Press.
日本経営者団体連盟　1995 『新時代の「日本的経営」――挑戦すべき方向とその具体策』
小此木啓吾　1978 『モラトリアム人間の時代』中公叢書.
小沢一仁　2004 「アイデンティティ危機における自分自身への違和感からアイデンティティを再考する」『東京工芸大学工学部紀要』27(2), 79-89頁.
Parmenter, Joshua & Galliher, Renée & Yaugher, Ashley & Maughan, Adam. 2020 "Intersectionality and identity configurations: A qualitative study exploring sexual identity development among emerging adults in the United States", Emerging Adulthood. pp.1-14.
Pillsbury, W. B. 1914 The essentials of psychology. Macmillian.
Prince, M. 1928 "The problem of personality: How many selves have we?" in Psychologies, of 1925, ed. by C. Murchison, Clark University Press.
Rattansi, A., & Phoenix, A. 2005 "Rethinking Youth Identities: Modernist and Postmodernist Frameworks" Identity: An International Journal of Theory and Research, 5(2), pp.97-123.
Rogers, C. R. 1959 "A theory of therapy, personality, and interpersonal relationships as developed in the client-centered framework" in Psychology: A study of a science Vol. 3, ed,by S. Koch, McGraw-Hill, pp. 184-256.
佐久間路子　2006 『幼児期から青年期にかけての関係的自己の発達』風間書房.
Schacter, E. P. 2004 "Identity configurations: A new perspective on identity formation in contemporary society", Journal of Personality 72(1), pp.167-200.
Schacter, E. P. 2005 "Erikson meets the Postmodern: Can classic identity theory rise to the challenge?", Identity: An International Journal of Theory and Research, 5(2), 137-160.
Schacter, E. P. 2014 "Multiple identities as viewed by Eriksonian theory and its critics: A psychological perspective with relevance to contemporary Jewish education", International Journal of Jewish Education Research, 5-6, pp.71-90.
Schoon, I., & Silbereisen, R. K. 2009 "Conceptualizing school-to-work transitions in context", in Transitions from school to work: Globalization, individualization, and patterns of diversity, ed. by I. Schoon, & R. K. Silbereisen, Cambridege University Press, pp.3-29.
杉本希映・庄司一子　2006 「『居場所』の心理的機能の構造とその発達的変化」『教育心理学研究』54, 289-299頁.
Syed, Moin & Juang, Linda. 2014 "Ethnic Identity, Identity Coherence, and Psychological Functioning: Testing Basic Assumptions of the Developmental Model", Cultural diversity & ethnic minority psychology, 20, pp.176-190.
谷　冬彦　2001 「青年期における同一性の感覚の構造――多次元自我同一性尺度（MEIS）の作成」『教育心理学研究』49, 265-273頁.
辻　大介　2004 「若者の親子・友人関係とアイデンティティ――16～17歳を対象としたアンケート調査の結果から」『関西大学社会学部紀要』35, 147-159頁.
堤　雅雄　2002 「『居場所』感覚と青年期の同一性の混乱」『島根大学教育学部紀要』36, 1-7頁.
上野千鶴子編　2005 『脱アイデンティティ』勁草書房.
Woolfork,R. L., Novanlany, J., Gara, M.A., Alklen, L. A., & Polino, M. 1995 "Self-complexity, self-evaluation, and depression: An examination of form and content within the self-schema", Journal of Personality and Social Psychology, 68, pp.1108-1120.

Review and Consideration of Trends toward Self-Pluralism in Late Modernity and Identity Theory

FUJINO Ryohei*[1]

Osaka University*[1]

【Abstract】

This article reviews the tendency toward self-pluralism in late modernity and identity theory. In late modernity, due to changes in economic structure, the development of technology, and the diversification of values, there has been a tendency to distinguish between different selves depending on the situation. By contrast, past studies, including Erikson's identity theory, have shown that self-pluralism is an obstacle to mental health. However, empirical research has shown that some adolescents are able to form an identity and maintain their mental health despite self-pluralism. In late modernity, when the self tends to be pluralistic, identity has become more important for the effective management of self in changing circumstances. In recent years, there has been a variety of research on supporting adolescents' identity from the perspective of "ibasyo." Since there have been few studies focusing on self-pluralism and identity, further research is needed.